

令和元年度 事業報告書

(事業年度：平成31年4月1日から令和2年3月31日)

1. アルペンスキーチーム

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿開催数： 4回

海外合宿開催数： 2回

■体制整備事業

会議開催数： 9回（JPC 加盟団体会議1回、栄養学、アンチ・ドーピング講演会、メンタル講習会、冬季デフリンピック視察）

■選手発掘事業 デフわんぱく教室へ派遣

(2) 事業の成果

- ① 冬季デフリンピックでのメダル獲得・入賞に向けて海外合宿を11月・12月初めに2回実施した。
- ② 第19回冬季デフリンピック（イタリア）で下記の通り3種目入賞した。
入賞：中村晃大選手 スーパーコンビ8位、大回転8位、回転8位
- ③ タレント発掘事業等で若手選手を発掘する事ができなかった。

(3) 事業に対する評価

- ① 強化選手の意識向上・技術向上を図るためにドーピング防止研修会や体力測定（6月・11月）に実施したが、体力的にも技術的にも向上が見られなかった。理由としては各選手のアスリートとしての自覚が足りなく自主トレーニングも不十分で、強化スタッフ間の情報共有・交換が不十分で、メダル獲得に向けた選手への指導・管理が共有されていなかったためである。
- ② 12月開催された、冬季デフリンピックは他国の選手が18～22歳と若く、レベルもさらにアップしていたため、今後は若手・ジュニア選手の育成強化と若手・ジュニア選手の発掘に力を入れていく。
- ③ 冬季デフリンピック開催日時が12月で十分な練習ができない中、中村選手はオールラウンド選手として健闘し、5種目のうち3種目8位入賞した。
- ④ タレント発掘事業で若手選手を発掘する予定であったが、派遣される予定だった強化スタッフが都合によりサポートできなく、至急他強化スタッフ間で調整するも都合がつかないこともあってスタッフを派遣できなかった。

(4) 課題と今後の取り組み

【課題1】

強化スタッフ間の情報共有・交換が不十分で、メダル獲得に向けた選手への指導・管理が共有されていなく、強化スタッフの自発的な行動が見られない

【取組方法 1】

取組として 2020 年度は強化スタッフ体制を刷新し、強化スタッフは単に選手をサポートするだけでなく、協会が目指すスポーツ・インテグリティ（誠実性・健全性・高潔性）の確保に向けて、チーム内のキーマン的（主導的）な存在になることを目指していく。そして人に頼ることなく自ら考え、率先行動できる行動力を身に着けながら自担当以外の業務にも視野を広げて総合力を発揮できるようにする。そしてガバナンス（管理体制）を理解し、コンプライアンス（ルール）を守る必要がある。

【課題 2】

団体独立事務所を設置できていない

【取組方法 2】

取組として 2018 年度より団体独立事務所の立地を検討している最中である。

【課題 3】

危機管理規程をベースにした危機管理体制がまだ整備されていない

【取組方法 3】

取組として引き続き、危機管理マニュアルの作成、緊急連絡先の整備をしていく。

【課題 4】

有望な選手を発掘することができていない

【取組方法 4】

取組として関東でのスキー教室だけでなく、協会事務所のある北海道、東北で地元ろ学校や連盟の協力の元スキー教室を開催していく。

2. アルペンスノーボードチーム

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿開催数：15 回

海外合宿開催数：5 回

■体制整備事業

会議開催数：19 回（JPC 加盟団体会議、栄養学、アンチ・ドーピング講演会、メンタル講習会）

■選手発掘事業 デフわんぱく教室へ派遣

(2) 事業の成果

1. 冬季デフリンピックにピーキングを合わせるため海外遠征合宿を3回実施した。また、冬季デフリンピック期間中に見つけた課題の克服と、更なる技術向上のため、1月に海外遠征合宿を実施し初めて海外FIS大会に参戦した。
2. 第19回冬季デフリンピックで惜しくもメダルを逃がしたが、PGS、PSL共に5位入賞することができた。

(3) 事業に対する評価

1. スカイツェックトレーニングの導入

雪上に出向かずとも屋内で滑りのイメージをシミュレーションできるスカイツェックマシン設備が首都圏にあり、今年度より強化合宿の一つとしてスカイツェックトレーニングを新たに取り入れた。放課後に学校から定期的に通える等、選手にとって利便性が良かったと感じる。また年間を通して滑走イメージを持続できることから、シーズン入りに体馴らしすることなく直ぐに本格的なゲートトレーニングに入れるメリットがあることが分かった。これは野藤コーチがこれまでに培ってきた選手育成ノウハウを我々に伝授してくれたおかげである。

2. 新型コロナウイルス感染拡大による影響

聴者トップレーサーに追いつくために2、3月に国内主要大会（JSBA スノーボード全日本選手権大会、FIS 全日本スキー選手権スノーボード競技）に参戦予定であった。しかし新型コロナウイルス感染拡大防止により事業が軒並み中止となり非常に残念であった。チームの最重要テーマである選手拡大に向けて月1回以上のジュニア競技選手タレント育成を予定していたが、これも新型コロナウイルス感染拡大防止のため事業中止となり非常に残念であった。

3. 第19回冬季デフリンピック

メダル獲得を期して挑んだ冬季デフリンピックは、結果的に5位入賞にとどまり1～4位までロシア国がメダル独占してしまう結果になった。次回冬季デフリンピックで強豪ロシア国に追いつくためには、ロシア選手と合同で練習できる合宿を企画し、ロシア選手と切磋琢磨することで自身の技術向上ができる環境づくりが必要と感じた。ロシア選手に比べると日本選手は体格面で劣るハンディがあり、そのハンディ克服のために更なる技術・スピード・パワーを身に付ける必要があった。具体的にはアイスバーンや柔らかいバーン、そして荒れたバーン、それも緩斜面、急斜面等様々なシチュエーション下でコースの攻め方を何度も繰り返し練習、常に安定したフォームを体に馴染みこませることが大切である。それだけでなくトレーナーが日頃から言っているフィジカル(体幹)強化も必要である。今後3年間はフィジカル強化をチームの重要テーマとして取り組みたい。

今回の冬季デフリンピックで若いロシア選手の台頭と中国が急成長してこと

から、今後は4、8年後の冬季デフリンピックを見据えたジュニア育成に本腰を入れないと世界から遅れをとってしまうことがわかった。これもチームの最重要テーマとして取り組まなければならない。

4. スポーツ科学に対する取り組みが弱い

一流アスリートを目指すには、実践トレーニングによる競技力向上はもちろん、スポーツ科学（フィジカル、栄養学、メンタル）も積極的に取り入れなければいけない。それにも関わらず選手本人は合宿以外の場で自ら積極的にフィジカルトレーニングに取り組もうとする姿勢が見られなかった。それだけでなくアスリートに必要な栄養バランスに留意しようという努力が見られなかった。もちろん、選手本人の自覚が必要だが、どのようにモチベーションを向上させていくかチームとしての取り組みも重要と考える。

（4）課題と今後の取り組み

【課題1】

タレント育成選手の発掘、育成

【取組方法1】

チームの最重要テーマとして捉え、次々回冬季デフリンピックに男子2人、女子2人を送り出せるようジュニア選手発掘事業を月1回のペースで実施する

【課題2】

チームとしての危機管理体制の構築

【取組方法2】

協会と共に危機管理体制構築の検討と危機管理マニュアル整備の検討を行う

【課題3】

団体独立事務所を設置できていない

【取組方法3】

R1年度に引き続き、団体独立事務所立地条件の検討を進めるとともに、資金源確保の一環として年会費の他に選手登録費、スタッフ登録料を継続して徴収する。

3. スノーボードフリースタイル

（1）事業内容

■選手強化事業

国内合宿開催回数：24回

海外合宿開催回数：1回

■体制整備事業

会議開催数： 15 回（JPC 加盟団体会議、栄養学、アンチ・ドーピング講演会、メンタル講習会）

■選手発掘事業 なし

（2）事業の成果

平成 31 年（令和元年）度は年間を通して以下のような成果を上げ、結果として 12 月開催の冬季デフリンピックで 3 名の入賞者を出すことができた。

- ① 人工芝の斜面を滑り降りジャンプしてエアーマットに着地できるコースがある安全性の高い施設で合宿を行い、ゲレンデでは難しいオーリーの反復練習とゲレンデでは安全性の面からなかなかトライできない難易度の高い技に集中して取り組むことができた。
- ② 人工芝の斜面に設置されたボックスやルールに乗って技を決めながら滑り降りる練習ができる施設での合宿を多く行い、雪上での感覚を忘れないよう基本的な技及び難易度の高い技の反復練習を行うことができた。
- ③ スノーボード専門学校のトレーナーによる、体力測定及びトレーニングを年 2 回実施し、体力向上や身体全体をうまく連動させる為のトレーニングを積むことができた。
- ④ デフリンピックはイタリアの高山で行われることになっており、酸素が少なくアイスバーンが多いことを見据えて 11 月に積雪量の多くイタリアに近いスイスの高山で滑り込みを行い、日本と違う雪質や様々な斜面に対応できる滑走技術及び心肺機能を高めるトレーニングを行うことができた。

（3）事業に対する評価

強化指定選手の技術レベルに個人差はあったが、デフリンピックで好成績を収められる為に強化指定選手全員がもっとメンタル面でも成長できるよう練習の難易度を高める必要があったので、コーチに安全な練習場所や安全に上達する為の準備をしていただきつつ、難易度の高い練習を数多く実施した。

その結果、強化指定選手それぞれの技術レベルを向上させることができ、チームとしてデフリンピックで 3 名の入賞者を出すことができた。

メダルは獲得できなかったが、本来目標としていたハーフパイプ競技が開催されないと判明してからスロープスタイル競技とボードークロス競技に舵を切り直して 1 年も経たない短期間で入賞できるレベルまで強化指定選手の競技レベルが向上したことは良かったのではないかと。

次年度からはこれまでの 4 年間と今回のデフリンピックでメダル獲得に至らなかった反省点を基に 2023 年に行われる冬季デフリンピックに向けて、強化指定選手の技術レベルの底上げができるように強化合宿の練習内容を密に計画し、コーチとの

連携を高めながら実施していく。

またスノーボードの技術レベル向上に繋がるよう様々なトレーニングの指導を実施していく。

(4) 課題と今後の取り組み

【課題1】

団体独立事務所を設置できていない

【取組方法1】

2018年度より選手登録費、公認料を徴収しているため、団体独立事務所を設置できるよう準備中である。

【課題2】

SNS等の宣伝により合宿で体験してもらい、期待できる有望な選手が2名見つけたが、まだチームに加入するまで至っていない。

【取組方法】

2020年度も引き続きスカウト活動を継続する。具体的には、SNS等を通して体験合宿のPRを行う等選手募集の宣伝機会を増やす。

4. カーリングチーム

(1) 事業内容

■選手強化事業

国内合宿開催回数：18回

海外遠征実施回数：0回

■体制整備事業

会議開催数：13回（JPC加盟団体会議1回、栄養学、アンチ・ドーピング講演会、メンタル講習会）

■選手発掘事業　なし

(2) 事業の成果

国内合宿および国内大会参戦合わせて17回実施した。年度後半は新型コロナウイルス感染拡大防止により参戦予定の国内大会が軒並み中止となってしまったが、その分を自主トレーニングに切り替える等対応してきた。

冬季デフリンピックでは、前回冬季デフリンピックに比べて他国のレベルが向上したため、持ち前の力を精いっぱい発揮したにも関わらず予選敗退してしまった。

一方、国内合宿では、強化指定選手だけではなく一般選手の方も一緒に練習を取り組むことができた。

(3) 事業に対する評価

【良かった点】

1. 国内合宿だけで練習を取り組むのではなく、各自自主的にトレーニングを取り組み、体重管理や食事管理などを実施した。
2. 事業成果でも報告したとおり冬季デフリンピックでは、いい結果を残すことができなかつた。その中で、唯一これまでにどうしても勝てなかつた強国スイス国から念願の一勝を勝ち取ることができたことは良かった。
3. 試合途中にポジションを変更する等、新たな試みを行った。これにより試合の流れが急に改善する等、チームにとって新たな発見が得られ、良かったと思う。
4. 体制整備事業について、事務スタッフや強化スタッフの刷新により、昨年度に比べて事業が増えたにも関わらず、より綿密な打ち合わせや提案することで、よりチームの状況を掴むことができてよかったと思われる。
5. 昨年度、JSC より不適切な会計の指摘を受け、急遽強化事務スタッフの刷新を行った。これまで強化選手が強化スタッフを兼務してきたが、選手として気持ちを集中させることができたのでよかった。
6. 冬季デフリンピック終了後の国内大会で、東北大会に優勝した強豪チームに勝利し、念願の優勝することができた。これは冬季デフリンピックの反省も含めて一人一人の課題を意識しながら冷静に試合に臨めた結果ではないかと思う。

【反省すべき点】

1. 冬季デフリンピックでは、選手一人一人のコンディションがまちまちであったことと、相手国の実力が向上したことが予選敗退した原因であったと思われる。
2. 昨年度の国内強化合宿の内容がほぼ変わっていないにも関わらず、技術面や体力面で成長した選手もいれば、どうしても成長できない選手もいた。このため、チームとして個々の選手に合わせたトレーニング内容の見直しが必要と思われる。
3. 冬季デフリンピックを含む海外大会に向けて、これまでに海外強化合宿にあまり取り組んでこなかつたこともあって、冬季デフリンピックでいい結果を残せなかつた。今後は海外強化合宿の回数を増やすことで海外のアイスシートや食事生活などに慣れる必要があると感じた。また、コーチ選任の方法を見直すことも重要と痛感した。

4. チーム選手の平均年齢も高齢化しており、チームの若返りも必要になってきた。今後は若手の育成も取り組んでいきたい。

(4) 課題と今後の取り組み

【課題 1】

団体独立事務所を設置できていない。

【取り組み方法 1】

団体独立事務所を設置できるように、選手登録費や公認料の新設など資金造成の検討を行う。

【課題 2】

チームの平均年齢が高齢化し、選手数も減っている。

【取り組み方法 2】

選手の増員とともに、スタッフの増員を目指し、新しい若手選手の勧誘に努める。

【課題 3】

選手のモチベーションがなかなか上がらない。

【取り組み方法 3】

オフシーズンは思うような成果がなかなか上がらず、技術の磨きこみも進まず、結果として全く何も形にならない状態であった。今後は、スタッフだけでなく選手も含めて全員で強化体制計画を理解してもらい、作戦理解の勉強会などを通してモチベーション向上に努めたい。